＜実践報告＞

「信大ＹＯＵ遊興譲館」における不登校生徒の「社会力」の向上

丸山大輔　　松本市立中川小学校
土井　進　　信州大学教育学部教育科学講座

The Improvement of Truancy through Social Capacity in You-Yu Kojyo Kan Project in Shinshu University

MARUYAMA Daisuke: Nakagawa Elementary School, Matsumoto City
DOI Susumu: Educational Science, Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	信州大学教育学部キャンパスに中間教室の性格を有する「信大 YOU 遊興譲館」を開設し，学生が不登校生徒と日常的に関わることによって,「社会力」がどのように向上したのかを明らかにする.
キーワード	不登校生徒　社会力　信大 YOU 遊興譲館
実践の内容	学生が 2 年間にわたって不登校児童生徒を対象にした集団活動を実施し，10 名の不登校生徒の「社会力」の向上に大きく貢献した.
実践者名	上記著者を始めとする「信大 YOU 遊興譲館」の学生スタッフ 24 名.
対象者	長野市，須坂市から「信大 YOU 遊興譲館」に通った中学生（8 名）
実践期間	2002 年 3 月～2003 年 11 月
実践研究の方法と経過	日々の活動記録をもとに週に 1 回学生スタッフによる反省会を行なった. 反省会での議論をもとに「信大 YOU 遊興譲館」の運営方法を改善し，年度末に実践記録をまとめた. 日々の実践と並行して門脇厚司氏の「社会力」についての書物を読み，「社会力」の育成を図る観点から調理実習，野菜作りの農作業体験，サッカーによる集団スポーツの実践に取り組んだ. 1 年目の実践により 6 名，2 年目の実践により 2 名が学校に復帰した. 興譲館卒業後の子どもたちにインタビューとアンケートによる追跡調査を実施した.
実践から得られた知見・提言	不登校になり他者との関わり不全の状態にある中学生には，「社会力」を有している学生や大人が,彼らと共に汗を流し,人と人がつながる体験の場を共有することが重要である.「信大 YOU 遊興譲館」を卒業した中学生は，多くの他者を自分の中に取り込み，自分を見つめなおし，自己肯定感や自信を持つことができた. それは彼らが学生・教員・地域の人々とふれあい，実際に汗を流す体験を積み重ねた結果であると考えられる.

1．はじめに

筆者は教師を目指す上で，学生時代に机上の学問に加え，実際に子どもと関わる経験をしたいと考えた．教育学部2年生の4月に行われた「第2期信大YOU遊広場」の説明会において，興味を引かれた活動が「信大YOU遊興譲館」（以下興譲館と略す．注1）である．これは不登校問題に取り組みたいという学生が集まって発足した活動である．中間教室でのメンタルフレンドの活動を経験した原山美樹（当時，生活科学教育専攻3年）が館長となって開設された．2年目の活動は，興譲館1年目に卒業していくことができず，引き続き参加することになった2名のために，五味渕嘉（当時，社会科学教育専攻3年）が館長となって活動を引き継いだ．

来館者は25名，そのうち継続的に通ってきた10名の内，9名が中学校に復帰し，高校に進学した．残った1名も中学3年生になってから学校に通えるようになり，2005年3月に高校入試に合格した．ここに通った10名の中学生は，興譲館で何を学び，感じ，どう成長していったのか，そしてなぜ，不登校だった彼らが学校復帰や，高校進学に至ったのか．本研究では，社会力の観点でこれを明らかにしようと考える．なお，10名のうち2名は参加回数が10回程度であったため，本研究の対象とはせず，8名を対象とした．

2．「信大ＹＯＵ遊興譲館」の活動概要

2.1 開館期間及び開館時間

興譲館における実践は約2年間(2002年3月～2003年11月)の活動であった．2002年度が毎週水・木・金曜日の9：00～19：00，計91日間開館した．この時期の1日のスケジュールはスタッフの大学生の事情に合わせ，90分間隔で運営されていた．

2003年度は毎週月・木曜日の9：00～16:30，計39日間開館し，2年間で計130日間の活動であった．2003年度は1日のカリキュラムが次のように具体的に決まった．

9：00～9：30　自由時間にやることを自分で計画し，その後読書．9：40～10：20　基礎的な学習(漢字プリントや様々な教科学習)．10：20～10：45　畑や水槽の魚の世話や観察をする．10：45～11：25　自由(自分で立てた計画を実行する)．11：35～12：15　自由（自分で立てた計画を実行する）．12：15～13：00　各自お弁当を持参して「松」の部屋で食べる．13：00～13：20　掃除をする．13：30～14：30　体験活動→農作業を体験する(主に月曜日)．学生の考案した活動を体験する(主に木曜日)．14：40～15：20　自由(自分で立てた計画を実行する)．15：30～16：10　自由（自分で立てた計画を実行する）．16：10～16：30　感想連絡事項を書いて，下館となる．

2.2 活動場所

信州大学教育学部のキャンパス内に，不登校生徒の居場所となる部屋として使わせていただくことになったのが，旧附属長野小学校の「松」の部屋である．YOU遊の活動の本部であり土井研究室でもある「竹」の部屋の隣である．「松」のすぐ近くにはYOU遊の「備品庫」があり材木や薪が用意されている．焼き芋などの火を使う活動をするには最適の場

所である．また，武道場が左隣にあり，目の前には広々としたグランドがある．グランドの手前にシシ沢川が流れ，川沿いに胡桃・梅・杏・びわ・いちじくなどの実のなる木があり，春には桜が咲く自然環境に恵まれた場所である．しかし，机も椅子もなく，水道も使えず，部屋の半分は物置となっていたことなど，「中間教室」（適応指導教室のこと）として十分な環境が整っているとは言えない環境であった．

2.3 参加した学生スタッフ

興譲館の活動には多くの学生が参加した．全国各地から生まれも育ちも異なる学生が集い，議論し，興譲館は運営されてきた．参加した学生は計24名である．(注2)

2.4 活動方法及び活動内容

興譲館は長野県教育委員会，長野市教育委員会によって，中間教室の一つとして認めていただくことができた．しかし，興譲館に通うことを登校日数と考えていただけるかどうかは，生徒が所属する中学校の校長先生の判断に任されることになっていた．

1 年目の興譲館は学校復帰を目的とせず，エネルギー充電期間として，自己肯定感を養うことに目標をおき，2 年目はそれに加え，様々な体験を通して成長の場となることを目標にして活動した．

興譲館において中学生を支える学生スタッフは，授業の空きコマを活用して活動に参加した．興譲館での活動内容は次の三つに分けられる．第一は学習の時間である．ここでは漢字練習，100 マス計算，読書などに取り組んだ．第二の体験活動の時間は学生の提案による農作業やモノ作りが中心であった．そして，第三の自由時間にはおしゃべりやカードゲーム，外での運動などを行った．これらの活動に学生スタッフも一緒になって取り組んだ．自由時間の過ごし方は，中学生の変容とともに進化し発展していった．

3．中学生の状況

2002 年度の興譲館における中学生の出席日数が実践記録に残されている．2003 年度に関しては，正確な記録がないが，2 名の出席率は 8～9 割であったと記憶している．

興譲館入館時の申込書及び追跡調査において，それぞれの中学生がどのような原因で不登校になり，その当時，そして現在どのような生活を送っているのかが明らかになった．

①中学校 1 年の A 君　興譲館出席日数 52 日

不登校の原因：小学校 5 年生の時，なんとなく学校に行かなくなった．1 日行かないでいるとそれが 2 日，3 日と続いていった．当時の様子：小学校 6 年になると少し回復し，保健室にも行くようになった．中学校は入学式には行ったが，やはりそれ以降は行かなくなった．現在の様子：中学校の特殊クラスA組に所属．本来の所属は 3 年 4 組．特殊クラスとは，不登校や保健室登校など様々な問題を抱えた子が通うクラスのことである．ここに通い，高校進学を目指して勉強し，無事合格した．

②中学校 2 年生の B 君　興譲館出席日数 63 日

不登校の原因：小学校 5 年生の時，クラス全体からのいじめ．無視や暴力が続いた．当

時の様子：小学校5，6年の2年間保健室登校をしていた．中学校へは行っていない．学校に行かなくなってからは，ずっと家にいた．現在の様子：高校1年．高校では郷土研究班に所属している．将来は手先の器用さを生かした仕事に就くことを目指している．

③中学校2年生のC君　興譲館出席日数29日

不登校の原因：中学校1年の6月，クラスが荒れた．それに巻き込まれ，クラスが嫌になった．それから保健室に通うようになり，2年生になった時にクラス替えもあったのだが，教室には行かなかった．当時の様子：家でゲームをしていることが多かった．友だちを呼んでゲームをしたり，友達の家に行ってゲームをしたりしていた．外でサッカーもしていた．学校では保健室や相談室に主にいたのだが，担任の先生が理科の先生であったため，理科の授業だけは出ろと言われ出ていた．中学2年の3月に興譲館を卒業し，中学3年の4月に教室に戻った．現在の様子：高校1年．部活動には参加していない．将来は，お父さんに憧れていることから警察官になることを目指している．

④中学校2年生のDさん　興譲館出席日数22日

不登校の原因：友人関係がうまくいかず，クラスから浮いた存在になってしまい教室や相談室へ登校することができなくなった．当時の様子：他の生徒と接する事に極端に恐怖感を感じ，登校の時間をずらしている．現在の様子：高校1年．Dさんは申込書の記述が少なく，インタビューも終えていないため情報が不十分である．

⑤中学校2年生のEさん　興譲館出席日数18日

当時の様子：Dさんと共に，相談室に通っていた．現在の様子：高校1年．Eさんは申込書の記述が少なくインタビューも終えていないため情報は不十分である．

⑥中学校3年のF君　興譲館出席日数71日

不登校の原因：中学校1年の冬，クラスの一部からいじめを受けた．差別という印象を受けた．当時の彼は今からは想像もつかないが，暗い性格だった．それが原因だったのではと，今は考えている．それ以来，相談室に通っていた．当時の様子：1週間の内2日程度で午前中だけ相談室に行っていた．担任の先生が数学の先生であったため，数学の授業には出ろと言われていたので，数学の授業は出ていた．現在の様子：高校2年．1年生の頃から弓道部に所属し，今は弓道部部長で1年生2名，2年生3名を束ねている．将来は，航空自衛隊や民間航空会社でパイロットになれたらいいと思っている．それが駄目ならエンジニアになりたいとのことで，学校の先生とも相談している．

⑦中学校3年生のG君　興譲館出席日数35日

当時の様子:右半身マヒの障害を持っていた.定期的に家庭に担任の先生が来てくれて，勉強を教えてくれていた．現在の様子：高校2年．G君は申込書の記述が少なくインタビューも終えていないため情報は不十分である．

⑧中学校3年生のH君　興譲館出席日数34日

不登校の原因：父親の影響が強い．中学校2年の頃家庭の問題で学校どころではなくなってしまう．当時の様子：家庭のことで頭がいっぱいの生活だった．中学校3年の時は，3

回か4回用事で学校に行っただけ．夜は友だちと遊び歩いていたこともある．現在の様子：高校1年．空手部(和道流)に所属している．将来は小学校1年生からの夢である獣医を目指している．動物が好きというのが根本にある．

4．「信大ＹＯＵ遊興譲館」での「社会力」向上をめざした体験活動

4.1　2002年度調理実習の実践

興譲館における中学生の昼食の実態にふれ，彼らが食生活を見直すきっかけになればうれしいという願いから，2002年10月12日より毎週金曜日に原山美樹を中心に調理実習の時間を設けることにした．以下に調理実習の実践をまとめる．

10月25日(金)　献立：親子丼，とうふとわかめの味噌汁，ほうれん草のゴマ和え　参加者：A君，B君，F君，G君，H君，丸山，小川，原山

11月1日(金)　献立：さやいんげんのゴマ和え，さばの味噌煮，豚汁　参加者：F君，C君，Eさん，Dさん，B君，A君，西澤，小黒，小川，原山

11月29日(金)　献立：だまっこ鍋　参加者：F君，B君，A君，Dさん，Eさん，原山，小川

12月20日(金)　献立：レアチーズケーキ，スパゲッティミートソース，白玉，スープ　参加者：Dさん，Eさん，A君，B君，F君，G君，C君，岡部，原山，小川

12月27日(金)　献立：コーヒーゼリー　参加者：B君，A君，原山

興譲館において調理実習を実践した意義を原山美樹は次のようにまとめている．

「調理実習を通して，友達と協力する力，仕事を分担してこなす力，道具がなかったり水道が遠かったりしてもやり遂げる力，ご飯粒まで残さず食べ，洗い場を汚さない力，など生活に必要な様々な力が日に日についていくのが分かった．」(土井編，2003)

調理実習で使う材料はなるべくそれぞれの家庭から持ち寄るようにした．こうすることで調理実習への意識を高め目的感を持てるようにした．さらに，学生スタッフが中心になるのではなく，料理に関心のあるC君を中心にしたり，生徒の中心人物であるF君から周囲へ声かけをするように促した．また，DさんとEさんの女子2人の参画を促し，料理に興味がない男子生徒も恥ずかしがらず参加できるような場作りに配慮した．

このような状況で行われた調理実習は，料理という共通の目的をもって，学生と不登校という共通の悩みを抱えた中学生が一緒になって，誰の手助けもなく，調理環境や道具も整わない中で，一から自分たちの手で作り上げた実践であったといえる．調理実習に集う様々な他者が共通の目的，目標に向かって，相互行為し，苦労しながら，文字通り汗をかきながら実体験を重ね，調理したものを食べることで喜びを分かち合うことができた．調理実習という他者との共同作業は，長い不登校の生活によって他者と共同作業をする機会を失っていた彼らにとって，「社会力」の下地となる他者を認識(理解)し，他者への共感ないし感情移入を可能にし，生活世界の意味や状況の定義づけの共有を促すとともに，調理を媒介にしてコミュニケーションを促進することになった．中学生から「苦労したからお

いしい」，「自分でつくるって大変だけどおいしいね」，「なんか家族みたいだね」という言葉を聴くことができたのはこういったことからではないか．このことから「社会力」が身についていったと捉えられるのではないかと考える．

4.2　2003年度「信大YOU遊興譲館」OK農場の実践

2年目の館長となった五味渕嘉は，武道場脇にある畑を興譲館のOK農場として開拓し，生活科の授業での野菜作りの経験を活かして，農作業体験の楽しさを共有するために中学生と次のような農作業体験に取り組んだ．

4月14日(月)「土に埋まったブルーシート取り」．中学生のねらい：土に触れること．土の重みを知ること．道具(スコップ)の扱いに慣れること．学生スタッフのねらい：中学生と共に農作業を頑張ること．農作業の気持ちよさを知ること．シートを取った時の達成感を味わうこと．活動の方法：20分間程度，学生と一緒にスコップを使って掘り下げる作業をする．その後，10分間のお茶休憩をする．その10分間にカプセルをブルーシートの下に入れておく．作業再開後，ブルーシートを取り除くとカプセルが出土．中には外国のお金と，その説明書，秘密の種が入っている．あらかじめカプセルが入っていることを伝え，動機付けとした．

4月21日(月)「土おこし」．ねらい：土をおこすこと．畑作りの基本を行うこと．活動の方法：「なぜ，土おこしをするのか」がわかる説明を4コママンガで最初にする．

4月28日(月)「ジャガイモ植え」．ねらい：ジャガイモについて知ること．うねの作り方を知ること．鍬の使い方を知ること．活動の方法：栽培暦を知ってもらうためにカレンダーに絵を張る．植え方を知ってもらうために次の質問をする．「ただ植えればいいと思う？」，「どのくらいの間隔だろうね」，「うねって何？」，「うねは作らないといけないの？」，「ジャガイモを切ってみよう」，「自分で切ったものを植えよう」．うねを作る時に鍬の使い方を教える．植え終わってから看板作りを提案する．

5月12日(月)「とうもろこし植え」．ねらい：とうもろこしについて知ること．活動の方法：栽培暦を知る．苗を植える．

5月19日(月)「サツマイモ植え」．ねらい：サツマイモについて知ること．活動の方法：栽培暦を知る．サツマイモクイズ．うねを作って苗を植える．

5月26日(月)「プチトマト植え」．ねらい：プチトマトについて知ること．活動の方法：栽培暦を知る．トマトを植える．支柱を立てる．紐で縛る．看板のボンド付け．

5月1日(月)「畑の看板作り①」．ねらい：工作の道具の使い方を知る．畑の担当者名を書く．協力して作ることの良さを感じる．活動の方法：名称を決める．木製で足は2本．

5月8日(月)「畑の看板作り②」．ねらい：工作の道具の使い方を知る．畑の担当者名を書く．協力して作ることの良さを感じる．活動の方法：組み立て方はB君が発案したとおり2枚重ねで行う．釘の正しい打ち方を教える．看板の両面に文字や絵を描く．

5月15日(月)「畑の看板作り③」．ねらい：工作の道具の使い方を知る．畑の担当者名を書く．協力して作ることの良さを感じる．活動の方法：色のクイズを行う．裏面のデザイ

ンを決める．ボンドをつけて完成させる．

5月22日(月)「草取り，間引き，土寄せ，追肥」．ねらい：作物に対する愛情を育てる．

6月30日(月)「畑の世話」．活動の方法：草取り．トマトの支柱を立てる．とうもろこしの土寄せ．ジャガイモが収穫できたらどう調理するか相談する．

こうして育ててきたOK農場の収穫はジャガイモが5.6キロ，とうもろこし15本，サツマイモ12キロ，ミニトマトは10本植えたが食べきれないほどであった．

10月9日「サツマイモで焼き芋」．活動の方法：落ち葉と小枝集め．火おこし．新聞を濡らし，アルミホイルで包む．この実践で，何よりも嬉しかったのは，収穫したものをおいしそうに食べる姿がみられたことである．そして，収穫時期を迎えたとうもろこしの世話をするために，興譲館の活動日ではないのにOK農場に通ったA君の姿は，不登校生徒であることを全く感じさせなかった．B君は身体を使ってする作業に抵抗があるようであったが，A君の姿を見て動くようになった．自ら動くという積極性を身につけてほしいのは山々であるが，以前のように何があってもやりたくないことはやらないというのではなく，友の動きに刺激され，自分の行動意欲に結び付けられるようになったことはB君の成長として評価できる．

4.3 サッカーを通しての社会力の育成

興譲館に中学生が5人以上集まった時は，自然と全員がグランドで遊ぶことが多かった．そこで主に行った遊びは野球とサッカーであった．彼らは外で遊ぶことを学習の時間はもちろん，体験活動の時間よりも楽しみにするようになっていった．サッカーの場面でのA君の成長の様子について，五味渕嘉は実践記録において次のようにまとめている．

「実際サッカーを行った中でのある子の変化には驚かされました．最初は夏休みの時で，決して自分から勝負を挑んでくるような子ではないと思っていたのですが，その子の方から私に対してドリブルの1対1を仕掛けてきました．次は10月の頃で，興譲館にきた当初の物静かな印象からはまるで想像できないことなのですが，一緒にやっていた子に対して，「パスくれっつーの！！」と大声で叫んで意思表示しました．最後は12月の頃で，サッカーをやり始めた当初は，自分で蹴って外してしまったボールを取りに行くのも渋っていたその子が，他の子がシュートして外してしまったボールを当然のように何の苦もなさそうに走って取りにいきました．」(土井編，2003)

筆者は，このような変化が見られたのは，多くの他者と遊ぶことを通して，中学生の「社会力」衰弱の原因の一つと考えられる「実体験の不足」を補うことになったからではないかと考える．彼らは興譲館に通って来た日はほぼ毎日外で遊ぶようになった．2002年度の興譲館開館日数は91日で，その中で彼らが大学生や他の仲間と外で遊んだ時間は莫大なものである．中学生が大学生と実体験を共有することによって，これまで眠っていた相手の気持ちを理解する力，即ち「社会力」の基盤が目覚めてきたといえるのではなかろうか．遊ぶということは，教育という観点では軽視されがちであるが，遊びを通して子どもが学ぶことは計り知れないものがある．そもそも，子どもが人とつながる原点は遊びであると

いっても過言ではない．それが不足していると考えられるのであれば，遊ぶことこそ最上の教育である．興譲館での遊びを通して中学生は多くの他者とかかわり，その中で楽しもうとするようになった．つまり良い人間関係を築こうとする変化が見られたのである．このことは「社会力」回復の重要な兆しであると考えられる．

5．「信大 YOU 遊興譲館」が不登校生徒の「社会力」向上に果たした役割

5.1 学生スタッフの人的環境が「社会力」育成に果たした役割

社会力とは，端的に言えば人と人とがつながり，社会を作り，運営しつつ，その社会を絶えず作り変えていくために必要な資質や能力のことである(門脇，1999)．その中心にいるのはいつも人である．人がいなければつながることもできないし，いくら人がいても，それが画一的な，同じような社会的地位や特性をもった人では，人に関心，愛着，信頼をもつことができない．社会には多種多様な人が存在し，その中に自分がいる．その人たちとつながり，その中で生きていくことのできる力が「社会力」である．

興譲館の学生スタッフは24名で，中学生が10名つまり，計34名の他者との関わりの場が興譲館であった．もちろん34名と限定しているのではない．先生，地域の方々，それぞれの生徒の保護者の方との出会いもあった．34 名というとおよそ一つのクラスであるが，ここに集まった人はいわゆる普通の子どもが体験する34名とは異なった人であった．

まず，学生スタッフの出身地は長野県，宮崎県，兵庫県，愛知県，群馬県，栃木県など様々であった．生まれ育った土地が違えば，人柄も，考え方も文化も大きく異なる．中学生がこれほど多様な出身地から集まった大人と関わることが他にあるであろうか．おそらくないであろう．

それぞれの学生スタッフの特技，趣味や性格を見ても一人として同じものをもった人はいない．学生スタッフが中学生一人ひとりに丁寧に対応した関わりは，彼らにとって有益であったであろう．ゲームの話をしたくても，ゲームの話ができる人がいなければできないし，サッカーをしたくても，サッカーをしてくれる人がいなければできない．いつも甘やかされているのではなく，時には怒る人がいたり，それをフォローしてくれる優しい人がいたりする．これが興譲館の人的環境であった．不登校児童・生徒の居場所として学校の相談室や保健室，中間教室などがあるが，それらにこれほど人的環境が豊かな場所はないであろう．信州大学教育学部に開設された興譲館の意義の一つがここにある．

5.2 物的環境が「社会力」育成に果たした役割

次に，興譲館の物的環境について考察する．子どもたちが普通に生活をする上で，周囲には，コンビニもファーストフードもカラオケもゲームセンターも何でもそろっている．畑をやる時は，機械が中心である．このように今，子どもたちは何もかも満ち足りた生活を送っている．加えてこのことは，中学生が一人で生きていくことを可能にしている．これでは，仲間と協力することも，自然や生きた人間との関わりも生まれない．

では，興譲館はどうであろうか．興譲館には何もないといっても過言ではない．水道も

使えなければ，ガスもない．遊びたくても，ボールもバットもない．無論テレビもビデオもゲームもない．調理実習をするにも，水を汲みに行き，鍋を探し，材料を持ち寄る．試行錯誤しながらの活動であるため，中学生も積極的に関わらなければ作業は進まない．その状況で皆が一つの目的・目標に向かって力を出し合い，協力するという環境を作りだした．遊ぶ時も，同様である．サッカーをするにも人が必要である．トランプもおしゃべりも一人ではできない．スポーツをするには，多くの人が必要になるし，その中でルールを決めて遊ぶ必要もある．この中で中学生は多くの他者と関わりながら，その関係を良好に保ちつつ，遊ばなければならない．つまり，興譲館での一日の活動は決して一人ではできないものばかりなのである．このような条件がそろった興譲館の場では，必然的に人と人とのつながりが求められ，人と人がつながることになる．人と人がつながり，様々な体験活動を重ねる．不足していた実体験はこれによって満たされ，多くの他者と関わりつつ協力し合うことでその経験は成功体験へとつながり，自己肯定感へとつながる．これが中学生にとって喜びや自信となり新たなステップを踏み出すためのエネルギーとなっていった．つまり，興譲館という不自由な環境が人と人を結びつける結果となり，それが実体験から成功体験，自己肯定感へとつながり自信となって次へのステップへと踏み出すエネルギーとなったと考えられる．

5.3 絆

興譲館には(1)，(2)で述べたように「社会力」を育成するために不可欠な要素がそろっていたと考えられる．その興譲館において様々な他者との実体験を重ねていくことで「社会力」が育成され，それが結果的に中学校復帰や高校進学に発展したと言えるのではなかろうか．「社会力」は具体的な数値として示されるものではなく，わかりにくいものである．しかし，確実に「社会力」がついたと判断できるものがある．「社会力」が端的に人と人とがつながる力と表されるのであるならば，その判断基準の一つにその人を取り巻く人間の数があると考えられる．不登校あるいは保健室や相談室登校していた頃の話を聞くと，彼らは中学生という最も友人関係が広がる時期に教室や学校に行かず，特定の少人数の仲間との関わりしかなかった．そのような状況では，一人ひとりの子どもを取り巻く人間関係は狭く，その人の数はごく少なかったと考えて間違いない．しかし，興譲館に学んだ彼らの現在は異なる．彼らは人間関係の幅を格段に広げ，その人数は少なくとも興譲館の学生スタッフだけでも24人増えた．そのスタッフは(1)でも述べたように多種多様で幅が広く，その子のことに関心，愛着，信頼感を持っていることは言うまでもない．加えて，同世代の仲間とも出会えた．これだけの人数が一人ひとりを支えているのである．つまり，興譲館を通して彼らの中の人と人とのつながりの幅は格段に広がった．社会は人と人とのつながりによって成り立つものであるから，彼らとって社会の幅が広がり，その厚みが増したのである．彼らにとっての社会の一員として，我々興譲館の学生スタッフが存在することができたのである．これはまさに人と人とがつながっている状況であり，中学生にとっても大学生にとっても「社会力」が向上したと判断できるのである．

そして，この人と人のつながりは容易に断ち切れるものではない．それは共に汗を流し，苦しみ，時には涙を流し，喜びを共有した興譲館での活動を通して培ったものだからである．このような絆は，単に表面的な関係に終始していたのでは到底築くことは出来ない．

興譲館は「松」や「竹」の部屋が信州大学大学院教育学研究科心理教育相談室として整備されることに伴い2年間で閉鎖されることになった．興譲館での手作りの教育実践を通して体得した「社会力」向上への方途を，これからも実践してゆきたいと考えている．

（注 1）興譲館の名は『大学』の「一家仁なれば，一国仁に興り，一家譲なれば，一国譲に興る」に由来する．江戸中期から明治にかけて次の6つの藩校や郷学校があった．米沢藩藩校「興譲館」（1776年），小城藩藩校「興譲館」（1787年），甲斐谷村郷学校「興譲館」（1842年），徳山藩藩校「興譲館」（1852年），備中西江原郷学校「興譲館」（1853年），荻野山中藩藩校「興譲館」（1868年）

（注 2）2002年度参加学生スタッフ(ほぼ毎週参加した学生)：那須良寛(大学院学校教育専修2年)，小黒あかり(教育実践科学専攻4年)，西澤俊輔(理数科学教育専攻4年)，小島真知子(地域スポーツ専攻4年)，小林則雄(地域スポーツ専攻4年)，町田竜太(社会科学教育専攻4年)，山本公三(教育実践科学専攻3年)，小川敦嗣(理数科学教育専攻3年)，小島　澄(障害児教育専攻3年)，増田美和(障害児教育専攻3年)，原山美樹(生活科学教育専攻3年)，平山　司(心理臨床専攻3年)，石関千絵(社会科学教育専攻2年)，北川伸尚(障害児教育2年)，五味渕　嘉(社会科学教育専攻2年)，丸山大輔(社会科学教育専攻2年)

2003年度参加学生スタッフ(ほぼ毎週参加した学生)：小川敦嗣(理数科学教育専攻4年)，小島　澄(障害児教育専攻4年)，原山美樹(生活科学教育専攻4年)，菅原勇介(理数科学教育専攻4年)，石関千絵(社会科学教育専攻3年)，北川伸尚(障害児教育3年)，五味渕　嘉(社会科学教育専攻3年)，下里洋平(社会科学教育専攻3年)，原かつ江(教育実践科学専攻3年)，前崎伸周(教育実践科学専攻3年)，丸山大輔(社会科学教育専攻3年)，黒崎藍子(教育実践科学専攻2年)，林真由美(教育実践科学専攻2年)，原絵里(教育実践科学専攻2年)，渡辺彩(教育実践科学専攻2年)

文献

門脇厚司，1999，『子どもの社会力』，朝日新聞社，東京，pp.59~68

門脇厚司・佐高信，2001，『＜大人＞の条件　「社会力」を問う』，岩波書店，東京

門脇厚司，2002，『学校の社会力　チカラのある子どもの育て方』，朝日新聞社，東京

門脇厚司，2003，『親と子の社会力　非社会化時代の子育てと教育』，朝日選書，東京

土井進編，2003，『第2期「信大YOU遊広場」の実践－臨床の知を求めて－』，信州大学教育学部，長野，p.125，p.24

（2005年4月30日　受付）